2026 年 11 月 9 日

【SUPER GT 第 3 戦・第 8 戦 /モビリティリゾートもてぎ レポート】

タイヤマルチメイクの最終大会、第 8 戦でヨコハマタイヤ装着車が 1-2 フィニッシュ、
2026 シリーズチャンピオンも獲得





2026 年の SUPER GT 最終大会が栃木県のモビリティリゾートもてぎで開催。タイヤマルチメイクの最後となった今大会で、GT300 クラスで VENTENY Lamborghini GT3(小暮卓史選手／ダニール・クビアト選手)が第 8 戦で勝利をおさめ、seven x seven PORSCHE GT3R EVO(スヴェン・ミューラー選手／渡会太一選手)が 2 戦連続の 2 位表彰台を獲得し、ヨコハマタイヤ勢が 1-2 フィニッシュとなった。また、リアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R（ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ選手／木村偉織選手）が 2026 年のシリーズチャンピオンに輝いた。

【11 月 7 日（土）第 3 戦】

第 3 戦の GT300 クラスは、フォーメーションラップからシグナルが変わり、各車がレーススピードへと加速していく中で混乱が生じ、その後の 3 コーナーでは複数台が絡む接触アクシデントが発生した。この影響でセーフティカーが導入されたが、混乱を巧みに回避し大きくポジションアップしたのが seven x seven PORSCHE GT3R EVO の渡会選手。14 番スタートから一気に 6 番手に浮上すると、17 周でピットインしミューラー選手に交代した。この時、タイヤ無交換を選択しピット作業を終えた組の中で狙い通りにトップに躍り出た。終盤は、2 台の先行を許し 3 番手でチェッカーを受けたが、レース後に上位の 1 台が失格となり、正式結果では 2 位となった。

ランキング首位でこの最終大会を迎えたリアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R は、トップチームらしからぬミスが続きシングルフィニッシュは叶わなかったが、14 位でわずかにポイントを加算。首位をキープして翌日の第 8 戦に挑むこととなった。







【11 月 8 日（日）第 8 戦】

第 8 戦では、今季初ポールポジションを獲得した VENTENY Lamborghini GT3 が序盤からレースをリードした。ピット作業ではリヤタイヤ 2 本を交換。タイヤ無交換作戦を選んだライバルの先行をいったんは許すも、2 本のフレッシュタイヤのマージンで終盤にはトップの車両を追い上げた。後半スティントを託されたのはクビアト選手。数周で一気にトップへ追いつくと、3 コーナーから 5 コーナーにわたって激しいサイドバイサイドのバトルを繰り広げて逆転、そこからは一気に後続を引き離し、クビアト選手は SUPER GT 初トップチェッカーを受けた。

2 位となったのは前日に続きタイヤ無交換作戦でトップに立っていた seven x seven PORSCHE GT3R EVO。ミューラー選手は優勝すれば逆転タイトルの可能性を残していたが、クビアト選手とのバトルの末にポジションを下げシリーズランキング 2 位となった。ヨコハマタイヤ装着車としては 1-2 フィニッシュでゴールを迎えた。






リアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R は 17 番グリッドと苦しい出だしとなったが、スタートを担当した木村選手がじわじわとポジションアップ。ミニマムの周回数でピットに戻ると、タイヤ無交換でオリベイラ選手へ交代しコースへ復帰した。すでにピット作業を終えたグループの中では 4 番手で後半スティントを開始。この時点でトップを走っていたのは seven x seven PORSCHE GT3R EVO だった。この位置関係でフィニッシュすればリアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R の戴冠となるが、前後の車両との接近戦の中でわずかに接触し、ポジションダウン。タイトル獲得の可能性は seven x seven PORSCHE GT3R EVO に傾いた。

しかし、リアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R はこれまで 2 度のタイトル獲得を誇るオリベイラ選手が、それまで以上の攻めの走りで 4 番手を取り戻し戴冠が決定。オリベイラ選手は自身 3 度目、木村選手にとっては自身初となる GT300 クラスのシリーズチャンピオンを勝ち獲った。





WedsSport BANDOH GR Supra(国本雄資選手／阪口晴南選手)が戦う GT500 クラスは、第 3 戦は阪口選手が予選で 4 番手を獲得。他車が落としたデブリの影響で 100%のアタックとはいかなかったが、それでも表彰台を狙えるグリッドポジションを獲得した。決勝レースでは、想定以上に新舗装の影響も大きく苦戦。タイヤ交換を 2 回行ったことで順位を下げたが、それでも最終スティントで装着したタイヤは翌第 8 戦に向けての手応えに。その第 8 戦は全車がノーウェイトという状況で、予選では 11 位。決勝レースはオープニングラップでコースオフしてしまった影響

で、前半スティントをミニマムで終える。後半は 35 周というロングスティントを安定したペースで走り切り、10 位フィニッシュ。タイヤマルチメイクで戦う最後のレースを、ポイント獲得で締めくくった。





■国本雄資選手（WedsSport BANDOH GR Supra）
【今回の成績：GT500 クラス　第 3 戦 12 位・第 8 戦 10 位】
第 8 戦は自分のミスもあって厳しいレースになってしまいました。2016 年にこのチームに入り、ずっとヨコハマタイヤで開発テストをさせていただきました。そこで学び経験できたことが、僕をドライバーとして一回りも二回りも成長させてくれました。感謝とともに、さみしい気持ちでいっぱいです。ヨコハマタイヤと一緒にもっと活躍して、優勝するところを目指していたのでそれが叶わず残念ですが、11 シーズンも一緒に戦うことができて良かったです。

■阪口晴南選手
【今回の成績：GT500 クラス　第 3 戦 12 位・第 8 戦 10 位】
第 3 戦の予選自体はうまく行かなかったのですが、テストもできない中で最終戦に向けてヨコハマタイヤさんが新規コンパウンドを用意してくれたり、最後の最後まで努力してくれた結果が予選タイムにつながったのかなと思っています。レースは低温になったことと新舗装になったことが我々にはネガティブでした。苦しい中でしたが、常に上を目指して変化し、最後の最後までレベルアップできたなと思っています。一緒に挑戦をし続けてくれたヨコハマタイヤさんに感謝しています。

■ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ選手（リアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R）
【今回の成績：GT300 クラス　第 3 戦 14 位・第 8 戦 4 位／シリーズチャンピオン】
非常にプレッシャーのかかるレースで、特に第 8 戦は、僕が接触でポジションを落としたことで、ライバルがチャンピオンになる状況を作ってしまいました。ポジションを取り戻すために、ここからの数周が自分のキャリアでも特に重要なラップだと理解して、集中して仕事をやり遂げた結果、チャンピオンになることができました。GT500 の時代からずっと、チームとヨコハマタイヤと一緒に戦ってきました。ここでおしまいになることはさみしいですが、彼らの仕事に心から感謝しています。

■木村偉織選手（リアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R）
【今回の成績：GT300 クラス　第 3 戦 14 位・第 8 戦 4 位／シリーズチャンピオン】
チャンピオンが決まった瞬間は、安堵感や嬉しさで、感情がゴチャゴチャでした。第 3 戦ではプレッシャーに負けて信じられないようなミスをしてしまいましたが、第 8 戦は気持ちを切り替えて戦い切れたことが良かったです。トラブルが出ず、常に安定した高いパフォーマンスのクルマを作ってくれるメカニックとエンジニア、そしてどんなコンディションでも僕たちのクルマに合ったタイヤを作ってくれるヨコハマタイヤさんのおかげです。とても感謝しています。

■小暮卓史選手 (VENTENY Lamborghini GT3)
【今回の成績 : GT300 クラス 第 3 戦 3 位・ 第 8 戦優勝】
最終戦にして、ようやく速さを発揮できたことはとても良かったです。今シーズンここまで非常に苦労しましたから、その分もうれしかったですね。僕のスティントでは、タイヤのパフォーマンス的には少し厳しい部分もあったのですが、クビアト選手のスティントでは無交換だった 2 本も履き替えた 2 本もいい仕事をしてくれました。優勝してシーズンを終えられるのは、最高の気持ちです。ありがとうございました。

■ダニール・クビアト選手 (VENTENY Lamborghini GT3)
【今回の成績 : GT300 クラス 第 3 戦 3 位、第 8 戦優勝】
僕自身、本当に久々のレースでの勝利なのでとてもうれしいです。無交換作戦をとってくるライバルに対して不利になることは分かっていましたが、我々はタイヤを交換する選択をしました。ピット作業でのタイムロスを戦略で巻き返す必要があることも、最終的にはバトルして相手を抜くことも必要になると思っていましたから、それがうまく行って良かったです。タイヤも、最後まで高いパフォーマンスを維持してくれて、よかったですね。

■中崎敬介 [横浜ゴム タイヤ製品開発本部 MST 開発部 技術開発 1 グループ・リーダー]
GT300 クラスでは、56 号車がシリーズチャンピオン、最終戦では 88 号車が今季初優勝、そして 666 号車と共に 1-2 フィニッシュなど、素晴らしい結果を出してくれました。長きにわたってヨコハマタイヤとともに戦ってきたチームが、この特別なシーズンを好結果で締めくくってくれたことに感謝します。GT500 クラスでは、低温になったことと新舗装の影響で思ったような結果とはならず、最終戦を終えて悔しい気持ちが残ります。SUPER GT からは離れる形になりますが、この悔しさと、SUPER GT というハイレベルな世界でこれまで戦ってきたことを糧に、技術部隊として常に進化を続けていきたいと思います。